

レズビアンの 白肌

貴美月 カムイ

レズビアン of 白肌 1

何度となく食事に行った仲ではあったものの、相沢健とは特別な関係というわけではなかった。

友達と言うほど仲はよくないし、知り合いと言うにはよそよそしい、微妙な距離を保っていた。

小川名悠里は普段から男装に近い格好をしていて、付き合う相手のほとんどが女性で、男性は成人してから一度しか付き合ったことがなかった。

社会人になったと言っても農業関係の仕事だったから、オフィス勤めのように綺麗に着飾ることも化粧をすることもなく過ごしていたが、肌は日に焼けてもすぐに白くなる体質で夏を過ぎ秋半ばになると既に日焼けは消えていた。

ちょうど秋も深まりイチョウの葉が落ちて土を黄色く染め始めた頃、六歳年上の相沢から食事の誘いがあった。一人で食べるのは寂しいから付き合って欲しいとの誘いだし、悠里としても相沢が他の女性を誘うためのリサーチとして使われているのがわかっていたから、安心してついていった。

しかし、その日に限って随分と遠くにまで車を走らせる。いつもは街の中だったからすぐに着いたので悠里にとっては遠く感じたのだ。

山の上まで来たところで小さなホテルに着き、こじんまりとしたレストランへ案内された。市街の夜景が砂を散らせたように月の下で輝いている。悠里は「いつか僕も彼女を連れてこんな場所へ来たいな」と思うほどだった。

料理はフレンチと和食が合わさったような美しい見た目と、味付けのしっかりした料理ばかりで今まで悠里が食べたことがないほど美味しいものだった。

「これ、合格。めちゃくちゃ美味しい。誰誘うんだか知らないけど、ここは来て損しないよ」

「それはよかった」

相沢は優しい微笑を浮かべた。

悠里は正直苦手なところがあった。年上という理由ではなく、どこか見透かされているような感触がいつもして、居心地が悪い。間の悪さを補うために自然と饒舌になり、喋らなくていいことまで喋ってしまう。いつものリズムと合わないだけかもしれないが、何故か相沢との間が気まずい。ちょうど今付き合っている女と、つまらないことで喧嘩をしたばかりで五日ばかり連絡を取り合っていないことも暴露してしまいそうになったが踏みとどまった。

悠里も沈黙に耐えるためにタバコに火をつけ、落ち着かせようとゆっくり吸うことにした。

「チョコレートの香りか。今日は落ち着きがないが、タバコを変えたのは喧嘩でもしたからなのか？」

「え？ な、なんでそう思ったの？」

「どことなく何かを思い出して苛立っているようだったから」

相沢の神経細やかなことが一種の恐怖だった。このように喋ってもいけないことまで見抜いてくる。嫌な気分だ、と悠里は感じていた。

レズビアンの白肌2

だがふと冷静になって相沢のことを見ていると、自分と同じようにスパークリングワインを飲んでいることに気がついたため、帰るつもりあるのかな？ と疑問に思った。

悠里の体をスパークリングワインの余韻が駆け巡る。よい酒は気持ちよく人を酔わせていく。悠里はだんだんと酔っ払い、嫌だと感じる相沢のきめ細やかさも気にならなくなってきた。

実際、何度も食事に誘われているが一度として悠里は悪酔いしたことがなかったし、男女の絡みもなかった。食事でおしまい。相沢から、それ以上誘ってくることなどなかったし、悠里もその気がないから、いつも食事が終わったら解散だった。

しかし今日は遠い。飲んだ時は代行タクシーを使っているが、今日も同じだろうか。

浮かんでは酔いで消える悠里の疑問は、タバコを吸っている際にタバコ嫌いの彼女に吐かれた猛烈な嫌味を思い出したことで掻き消され、思わずぐっとグラスの酒を飲み干してしまった。

これがいけなかった。少しずつ飲めばほろ酔いを保てたものを、いきなり飲むものだから急にアルコールが回ってくる。特にスパークリングタイプは既に飲んだ分の発泡が後追いでくるため、デザートを食べ終わった頃にはふらふらになってしまった。

相沢に抱えられながら「お前酒強いよね。あんたみたいに強くなれたらいいなって」とぼんやり口走ったが「すぐに酔える方がいいと思うことが沢山ある」と聞こえたような気がした。

部屋に連れ込まれ、放り込まれるようにベッドに寝かされた。傍には水入りのコップを用意してくれる。

「僕、さめたら帰らないと」

「いいよ。二人分部屋とってあるから」

「計画的犯行？」

「別に。いつも万が一の時のために備えているだけだよ」

「僕とセックスしたいの？」

「したいと思うことはあるけど、する気のない人とやっても面白くない」

面白くないとはどういうことだろう。悠里は体を起こし水を一気に飲みすると、まだくらむ体を横にした。ダブルベッドではなくツインタイプの部屋だから密着して寝ることもないだろうと考えた。その点では相沢を信用している。

悠里はいつの間にか浅い眠りにつき目を覚ますと、ちょうど風呂上りの相沢がタオル片手に全裸で目の前を歩いていた。

少しだるめの声で「あんた隠すとか、恥ずかしいとかないの？」と言うと「なんだ、起きてたのか。別に男には興味ないんだろ？」と返される。

「いや、そうだけどさ……」

悠里の視線は相沢の胸元へと行く。ほどよく引き締まった胸。股間にも目をやるとペニスが見える。だらんとやる気なく垂れている。

レズビアン of 白肌 3

相沢は悠里を気にすることなくタオルで頭を拭き、傍のテーブルに置いてある炭酸水を飲んでいる。

「なんか着ろよ」

「気になるのか」

「そういう問題じゃないじゃん」

悠里は後悔しはじめていた。男のものを現実で見せ付けられたのは以前に一回だけ。同じように酔った日で、何かの弾みでホテルに入ることになった。その時相手のは天井まで伸びていくんじゃないかというほど勃起していたが、肝心のセックスは、ただ荒々しくされるだけで何も感じず、中に出さないでと言ったのにも関わらず中出しされた。その時の忌々しい記憶が少しだけ甦ったのだ。チラチラと相沢を見ながらも、どうしてこんなことになっているのか、頭の中がこんがらがってくるようで辛かった。

「ねえ、お前は僕としたいとは思ったことないの？」

悠里は女性として見られるのも嫌悪感があったが、逆にここまで反応がないのも癪に障る。女には確かにもてるが、男にもしょっちゅうナンパされる。そんな男を片っ端から断ってやるのも一つの快感だった。「猿ども。ざまみろ」とさえ思うこともあった。しかし無反応過ぎるのも女性とか男性であるとか以前に何かコケにされているようにも感じた。

「やりたくない女は興味はない。どこかで嫌だと思ってやるのと、望んでやるのとでは女はイキ方が違うんだよ」

相沢の言葉は悠里にとってピンとこない。

「へえ？」

悠里は気のない返事をしたが、ふと思い返してみた。ほとんどが受身の女ばかりで、こちらが攻めることばかりだった。ペニスバンドで相手を突き立てたり、指で責めたてたり、互いのヴァギナをこすり合わせたり、舐めさせたり。支配欲が強いせいか、相手が言いなりになるまでが攻めがいがある気が悠里にはしていた。当然セックス中は逝かないわけではないが、逝き方の違いに差があったことなど一度もない。

「どう違うんだよ？」

「どうって言われても、長くずっとイッてる感じかな。人によって違うから、こうとは言えな

いな」

悠里は逝ってもなお攻め続けることを言っているのかと思った。違うような気もした。相沢のセックスに興味湧く。

「お前、一体どんなセックスしてきたんだよ？」

「そんなの聞いてどうするんだ？」

「こ、今後の参考にする……」

そこからは相沢と悠里が交互にセックスの経験談を話すことになった。

人に話すようなセックスだから普通の話だと面白くないと感じたのか、相沢の話は奇抜なものばかりだった。

レズビアン of 白肌 4

木に後ろ手に手錠をし、電池が切れるまでバイブを入れている間フェラチオをさせ、最後にはじらしながらゆっくりと攻めて「逝かせて欲しい」と泣いて言うまで続けたとか、フィルムコーティング状にされた媚薬を秘部に入れて、時間差で媚薬が効くようにしたと言ひ、実はただのフィルムコーティング状の何も入っていない粒を入れて女の崩れ具合をつぶさに観察しながら、デートをし、ことあるごとに言葉責めをして最後には乱れた女が発狂するぐらい求めてきたとか、習字用の筆を数本用意して目隠しをして全身を撫で回して体が敏感になるまでやったとかだった。

一方悠里はと言うと、ほとんどが俺様気質で、こうしろああしろ等、男っぽいぶっきらぼうな口調で相手を責めたり命令したり、それ以外は特に奇抜な事はなかった。

まるで変わったセックス発表会のような流れになっているから悠里は話をする事自体ためらいがあったし、相沢の顔色を伺うように話していたものだから、今まで接してきた強気の態度とは一変、借りてきた猫のようにおどおどしていた。

「そんなかわいらしい一面があるんだな」

「か、かわいらしいってなんだよ！」

女性らしいとか、かわいい、などの言葉は気を張っている悠里としては嬉しくない言葉だった。

「一応、普通の話をしてても普通だみたいなこと言われても参考にならないと思って少し趣向の凝ったものを喋ってみたが、何か参考になったかい？」

話をはぐらかされたようでムツとしたままだったが悠里は「い、一応……」と消え入るような声で返事をした。

「なんだ。新婚セックスレスの夫婦みたいに気のない返事だな」

「し、知ってんのかよ」

「例えだよ。例え」

「あ、ああ」

悠里は今相方と喧嘩をして仲が悪いことがばれているのではないかと一瞬心臓が音を立てたが、自分の勘違いだとして何故かほっとした。

「どうした？ 別れたのか。それとも喧嘩中か何かか」

「べ、別にそうじゃねえよ！」

声を荒げるのを見て相沢が突然両手首を掴んでのしかかってきた。悠里が一切抵抗できないくらい力が強いことに驚きながらも背筋がぞくっとするものがあった。

「嘘がつけない性格のようだな」

「お前、裸でのしかかってくるなよ。お前のが僕の服についてんだろうが。僕はお前の裸なんか見たくねえんだよ」

話を逸らそうとするが、相沢はその手にはのらない。相沢が見つめてくるので悠里は目が合わないように顔を背けるのが精一杯だったし、実際全裸でのしかかられていることが一つの恐怖でもあった。セックスの話をしている時は気にもならなかったのに、意識し始めると凶器を突きつけられているような感覚になる。

レズビ안의白肌 5

「どいてよ……お前裸じゃん……」

涙目で相沢を見つめた時、目が合った。それきり、目を逸らせなくなり、初めて相沢の瞳が怖いと思った。何故なら、自分が知りたくもない心の奥底を見透かされているような、ある意味金縛りにあったかのような恐怖感が全身を支配し始めていたからだった。

相沢は悠里の手首を掴んだまま、ぐっと外側へと広げていく。

ピンと腕が伸びきると余計に相沢と密着していくが、手首がしっかりと拘束され、腕が伸びきると悠里は「あっ」と自分でもあまり出したことのない妙な声を上げたのだった。

「やっぱり」

相沢がふっと笑い、優しい笑顔になる。

金縛りが解けたように悠里は抵抗しだす。

「な、何がやっぱりなんだよ。放せよ」

「お前マゾっ気があるよ」

「えっ……？」

生まれて一度として言われたことのないセリフだった。馬鹿馬鹿しい。小学校中学校だって男勝りのような感じで通っていたし、高校はダントツで女の子からのラブレターが毎日のように下駄箱に入っていたり直接告白されたりした。今までからは正反対の言葉。驚きを乗り越えて、頭が真っ白になった。

「よし、ちょっと試してみるか」

相沢が悠里から離れる。

「え？ 何を？」

「ちょっと手を軽く縛られてみないか？」

「え？ 何言ってんの？」

「試しだよ。試し。嫌だったらすぐ止めてやるよ。ただし、嘘はつかないようにな」

興味はあった。時間と余裕をくれたおかげで悠里の中に「相沢の期待を裏切られたらどんなに

いいことだろう」と、いたずら心が湧いた。

「いいよ。本当に僕が嫌って言ったら止めてくれるんでしょ？」

「もちろん。これからもリサーチ付き合っ欲しいし」

取引が成立するや否や、相沢は「確か今日は……」と言って椅子にかけてあった上着のポケットをまさぐって布ガムテープを取り出してきた。

「な、なんでお前、そんなもの」

「今日ちょっとダンボール詰め作業があったんだよ。珍しく。仕事場からそのまま持ってきていたの思い出したんだよ」

相沢が片頬を上げながら嬉しそうに悠里の手を後ろ手に縛る。

「なんだよ。こんなもん……」

と、悠里が鼻で笑おうとしたところ、ぐいっと手を上に上げられ「ああっ」と声を上げてしまった。

レズビ안의白肌6

「ふっ……ほらな」

「な、なにがっ！」

相沢の微笑が苛立たしい。

「前世は犬か馬か。何かを引く仕事でもしてたんじゃないのか？」

相沢が何を言っているのか理解できない。そのまま縛られた手を後ろに引かれ、尻を洋服越しに叩かれるが、その時自分でも思いがけず「あんっ」と声を上げてしまい、恥ずかしさに飲まれた。

「悠里はタチ（責める方）じゃなかったのかよ。なんだよその声は」

「て、てめえ！ 馬鹿にするな！」

止めると言えばよかったものが、意地を張ることになってしまい、今度は意識して声を抑える悠里だったが、必死に息を堪え、変な声が出ないようにするのが精一杯だった。

相沢も少しずつ手に力が入るようになる。一発、一発と叩かれるごとにじわじわ痛みが蓄積してくるが、どこか気持ちがよく声が出そうになる。

——なんだろうこれ。声出そうになる。

初めての感覚に悠里は喉を締め付け必死に堪えた。

だが、相沢もそれほどしつこくやってくるわけではなく、少し続けたところで、すぐに止めた。

「え？ 止めるの……？」

「止めるね。素直じゃないから。それよりも、時々責めでもなく受けでもない気分にならないか？」

「え……？」

確かに気乗りしない時はあった。その時は触れ合っているだけでいいと思っていた。だがそれとこれと何の関係があるのか悠里には理解できなかった。

「つまりだ、悠里は真正のSっ気のあるやつじゃないんだよ。ほら、どっちかにカテゴリーしたくなるだろ。SだったらずっとS。MだったらずっとMとか。特にSっ気とか面体保つために気

分じゃない時もそうしなきゃいけない苦痛を味わいながら演じるってわけだ。まだまだ素直じゃないんだよ」

「な、なんだよ……わけわかんないって」

「今の悠里の体が証明してる」

悠里には相沢の話していることが上手く飲み込めない。言葉はわかるのに自分がそうだと考えづらいためだった。後ろ手でベッドに座り相沢の話を真面目に聞いているが、今の自分の状況を忘れるくらい突拍子もない話ばかりだった。

「わからないやつだな。こういうことだよ……」

相沢は悠里の首筋にきつく噛み付き押し倒してきた。悠里は首筋に感じる強烈な痛み、痛がるどころか妙な声を上げたことに気がつかないほどだった。

「や、止めて……傷つけないでよ。明後日だって収穫があるのに……ばれちゃう……」

悠里は首筋に確実に傷がついたことがわかった。

なんで、どうして、絶対に嫌な事しない男だと思ってたのに。

悠里の持ち合わせていた男っぽさは相沢の奇行についていけず混乱するばかりで出せなかった。

次に相沢は少し切れたであろう首筋を舐めてきた。少しだけ痛みが走る悠里は、「傷ついた」という気持ちと、肉食獣に食べられる草食獣のような諦観が支配し始めてきた。

相沢は悠里を持ち上げ鏡台の前で下ろし、後ろ手を引っ張りながら言った。

「だんだんと繕っていたものが剥がれてきたな。そんなもんなんだよ。人間何者でもないだろ。ただ自分でこうあろうとか、他人からこうあれとか、そんな固定観念でしかないんだよ。悠里。お前は自由でいたいだけだろ。押し付けられるのが嫌なだけで、自分でいたいだけだろ。役割を押し付けられると嫌なだけだ。ただの、そういう女なんだよ。だから男になったんだろ。でもそれも時折違うと感じている。男だとか女だとかいう枠組みの中でどちらかにつかなきゃいけないと思ってる。どちらでもいいしどちらでなくてもいいんだよ」

役割。

演じる。

自由。

確かにそうかもしれない、と考えた。最初は自由でありたいと色々な束縛から逃れたはずなのに自由の先に役割を背負わされる。その役割を背負わされたら今度は演じなくてはいけない苦痛が待っていた。でも、相沢の今の行為をずっとして欲しいわけでもない。ただ「一時楽になれば」と思う自分もどこかにいた。

「ぼ、僕、彼女と喧嘩したんだ。別れてないけど……」

「ふうん。重要なことか」

「いや、ただ僕がタバコ吸ってるのが嫌で……ただそれだけなんだ……」

いつの間にか悠里の中に身構える気持ちが消えてきていた。鏡から目を逸らしうな垂れる。首筋に残る痛みが単純に悲しい気持ちを胸から引きずり出してくる。悠里は涙を落としていることに気がついた。何故、涙が、と思った。

喧嘩をしたことに心を痛めているのか、傷つけられたことが衝撃なのか、もしかしたら彼女から自分の安息の時間にケチをつけられたことが悲しかったのかもしれないと初めて気がついた。

ぐいっと後ろ手を引っ張られる。悠里は声も立てず涙を流しながら「あっ」と震えた声を出す。

「何にもならなくていい。自然のままでいればいい」

相沢が耳元で囁く。鏡越しに相沢と目が合う。顔を横に向ければ相沢の唇と合わさる。

悠里は顔を横に向けキスをねだると見せかけて相沢の首筋に噛み付いた。

「っっ！」

レズビアン of 白肌 8

「おかえしだ。僕の体に傷をつけた罰だ。毒が回って死ねばいい。男なんてみんな消えればいい」

「そうかもしれないな。望む世界なんてどこにもない」

悠里は悔しかった。できれば知って欲しくなかった。自分も知らない感情を相沢は的確に捉えてくる。そのことやはり気に食わず、そして居心地が悪く、悔しい。

「高層ビルの最上階から飛び降りて地面で跡形もなく弾けてしまえばいい。僕はお前さえいなくなったら、きっと辛くならずすむんだ」

「つまり自分に嘘をつき続けると？」

素直になることへ悠里は必死に抗う。

相沢は後ろから力強く悠里を抱き、乳房を服の上から掴んだ。

その時相沢の腕にきつく抱かれていることが、むしろ腕や体できつく拘束されている状態になったのが悠里の全身に官能の泡を湧き立たせた。乳首は勃起し痛いほど張り詰め相沢の指を押し返していきそうだった。

「ああっ、ぼ、僕……僕っ……くっ……ああんっ……お前なんて、お前なんて……」

悠里自身わからなくなってくる。どんな自分でいればいいのか抛り所が消えていき、頭の中が白くなってきて、ただ今感じている衝動に身を任せたくなくなってくる。

「死ねっ。死ねっ……」

か弱い呪詛の言葉だった。振り向かされると全裸の相沢がいる。

なんて憎々しいんだろう。なんておぞましいんだろう。雄の肉体。汚物のように臭ってくるようで気持ちが悪い。やっぱり男は受け付けない。男は嫌だ。

悠里の中で嫌悪しかないはずなのに、同時に心を酷くざわめかせる、予感にも似た感覚があった。

悠里の黒ジーンズとカーキ色のワイシャツが半分脱がされる。肩越しから背中へと滑るように艶めく肌が露出されブラ越しでも白さが映えた。

抵抗よりも、まるで他人の映像を見ているような気分と、これから起こることへの冷静な分

析と、そして信じられないほど息を荒くしている自分への驚きが入り混じって、それらの渦巻く感情への拒否が相沢への罵倒となって悠里の口から次々と零れた。

「お前なんかドブに落ちて溺れればいい。豚の餌になって食われちまえ。腐れちんぽぶらさげて気持ち悪いんだよ」

相沢の指がそのまま股間に来ると思い太股をピツタリと閉めたが相沢は左尻を思い切り掴んで広げてきた。

「くああっ……」

いちいち変な声を上げる自分を苛立たしく感じた悠里は相沢の「望んでいると逝き方が違う」という言葉を思い出す。

——まさか、僕こんなことを望んでいる……!?

悠里は彼女としている時、漏れ出すような声など上げたことがなかった。荒々しく感じた声を「ああっ!」「いいぞっ!」などを出すだけだったために女のような声を出すこと自体に拒絶感があった。

「ねえ、僕は女としてお前を相手することは出来ないよ。やっぱりできないっ！」

相沢はほくそ笑んでいる。まるで「何一つそれは関係ない」と言わんとばかりに。

「そう言うと思った。だったら男の気分になんか試してみるか」

手を縛り付けていたガムテープをはがすと服やブラジャーを一気に剥ぎ取っていく。悠里はその間激しい抵抗など一切しなかった。

「僕に何をやるの？」

「色々体験してみるのもいいだろうさ」

相沢の考えていることがわからない。ただ頭の中は戸惑いだけだった。

鏡の前で尻を突き出させる格好になった悠里は少しだけ下げられたショーツの奥へと手を入れられようとした。悠里はもぞもぞと太股を動かし抵抗をすると、尻を思い切りぶたれ「ああんっ！」と色めいた声と胸の奥から混みあがってくる吐息を漏らした。自分でも驚くほど叩かれる事に弱い。悠里がジリジリと股間を熱で溶かし始めていると相沢の指がすっ切れ目へと侵入し、隠された茂みの奥から発せられる自らのいやらしい音を聞いた。

耳の奥に響く痴態が脳髄を痺れさせるようで、悠里の中に抵抗と官能の葛藤を生んだ。

「あああっ……」

相沢の指は軽く切れ目をさするだけで、あまり中へと入ってこない。それでも十分に濡れて汁が垂れてきているのがわかる。鏡に映る自分の顔が、もはや男のものではなく雌そのものになっていることに、悠里は驚きもしなかった。ただ、今まで自分がこだわってきたものが崩れていきそうで、どこか寂しい気持ちを覚えていた。男に対する怒りや憎しみのようなものは屈辱に形を変え、その屈辱が犯されていることへの陶醉を生み出してきていた。

だが、この期に及んでも自分がどうしたいのかわからない。相沢の指がもどかしく感じる。いっそのこと快楽に溺れてしまえば、もやもやした気持ちも晴れるかもしれない。それに彼女との喧嘩の件もふと頭をよぎり、頭ごなしに言ってきた彼女に仕返しをしたいという気持ちも浮かんできた。

そして「仕返し」という気持ちが悠里に犯されることへの許しを与える。

相沢の指はいつになっても刺激の足りない愛撫に過ぎず、もっと感じたい気持ちもあるが口に出すのも媚びているようで抵抗があった。

そんな悠里のぼんやりした気持ちを平手打ちにしたのは、相沢がコンドームを装着した後だった。

ついに入れられるんだな、と悠里が覚悟した相沢の指はヴァギナを指全体でゆっくりと愛撫した後、近くにある蕾へ行き、愛液を塗りたくる。

「え？ ちょっと。ねえ、んああん……」

無数の指が背中を歩いてくるようなざわめきを感じ、悠里は声をあげた。

「悠里。女として相手しなくたっていい。今日お前はずっと男のままでいいんだよ」

「どういうこ……ちょ、ま、待って。くあああん……」

相沢のペニスの先端が蕾の奥へとねじ込まれる。

「あ、あ、あ、あ、待って。え？ そ、そっち？ あ、あ、あ、抜いて。抜いて」

悠里の頭は混乱していた。相沢は先端をゆっくり、浅く出し入れして一度も淫猥な事を使ったことのない穴を慣らそうとしていた。

「い、嫌だ。く、くそっ。変態ホモ野郎。糞にまみれて窒息死すればいいんだ」

この場に来て初めて悠里は痴情から抵抗の意思を示し、相沢からアナル処女を奪われることから逃れようと体をよじらせたが、

「ん？ 初めてなのか？ 冗談だろ？ まるで使い慣れた感じ方がするぞ？」

と相沢に言われたことが意外で、

「嘘でしょ？ 僕一回もつかっ、ひゃあうっ！」

言いかけたところで徐々に深くまで挿入され、驚いた悠里は息が胸に急激に吸い込まれて呼吸困難になった。

「やっぱりな」

と相沢が言った気がしたが、意識は遠くなりかけた。

入ってくる時一瞬抵抗があったが、すっと入った印象があった。入ってからはペニスを押し出そうと悠里のアナルは抵抗をしている。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

死にかけの犬のように小刻みに息をする悠里は呼吸を整えられないでいた。深く息を吸うとアナルが締まる。硬い感触がアナルを割いていきそうな怖さがある。涙が流れ言葉も出せず鏡台の机に手を突いたまま異物が入ったことを信じられないままだった。その間相沢はずっと動かずに悠里の様子を眺めていた。

少し落ち着いてくると、アナルの筋肉がペニスを押し出そうと力が入るたびに妙な感覚がヴァギナを支配し始めた。

ヴァギナがきつく締まるのがわかる。息が少しずつ整ってくるとアナルがきつくペニスを締める度に尻の肉が震えるほど快感が高まってきていることに気がつく。漏らしてしまいそうな感覚がペニスを締め付けるのに反し息を整えアナルを緩くしようとする妙な繰り返し。

「痛くないんだろ？」

「はあ……はあ……」

まだ言葉が出せるようなほどではなかったが、目をつむりながら二度三度頷く。涙が鉛のように落ちて床を打ちつけた。

感じている。お尻の穴で。汚い穴で。

美しい大理石の胸像のような自尊心が鋼鉄のハンマーの強打で粉碎されるような感覚を悠里は持った。今自分が涙ながら見下ろしているのは床ではなく粉々に散った自尊心の破片なんだ、と思った。

「緩い尻だ」

相沢の声が胸に刺さる。

――嘘。僕、初めてなのに。最初は痛いものなの？　なんで？　僕の体が異常なの？

悠里の思考を相沢の動きが打ち砕く。相沢が悠里の両手をまた引っ張り腰を深く入れてきたのだ。

「はああああああんあああああ.....」

奇妙な声を上げながら悠里は逝った。太ももが冷たくなってくるほど汁が垂れ濡らしている。

「僕、僕.....お尻が.....くあああっ！」

――どうしよう。どうしよう。ちんぽが凄いドクドクしてるのがわかる。

相沢が手綱を握るように悠里の手を引くと「ああん」と雌の声が漏れる。悠里も自分が抵抗できないほど体を固められると感じてしまうことが少しずつわかってきていた。

「ぼ、僕、こういうのが好きだったの.....？」

「好きかどうかよりも、素質があるかどうかだな」

一定のペースで出し入れされるペニスにアナルも慣れてきたようでアナルが締め付けるたびに悠里の体も震え、息苦しかった体からも苦痛の声色が取れて色濃く悦楽の色に甘く染まってきているのがいやがおうにも耳に届く。感じている自分に余計に高ぶってきた。

「はあうん。ああん。んんんあああ」

「だんだんよくなってきたのか。どうだ？　男として犯された気分は」

「し、ね、よ.....ばか.....や.....ああああんっ！」

悪態をつく間、悠里は感じるのを我慢しようと思い、体から力を抜いて喋られるよう試みたが、アナルが意思とは関係なく余計にきつく締まり一気に快楽が走った。

相沢がぐっと腰を入れてくると逝くと同時に勢いよく漏らしてしまった。痙攣しながら潮を噴く。尻も太もももビクビクと震え、床に三度四度と漏らした汁を叩きつけていた。

相沢が悠里の顎に後ろから手をやり顎を持ち上げる。ずっと見ないでいた顔を見せ付けられ、悠里は涙で濡れたぐしゃぐしゃの顔から目を逸らそうとした。ずっと泣いていることに悠里は気がつかなかった。足から力が抜けかけていて立っているのがやっとなのに相沢は「よく見ろ」と優しく言うてくる。

悠里は自分の少しだけ嬉しそうな顔を見ると余計に涙が流れてきた。男らしさの欠片もない。最初は嫌で泣いていたはずなのに、今はアナルセックスを受け入れてしまい過去にないほど感じてしまった自分に恥ずかしさと悔しさを覚えていた。

と同時に悠里の中で何かが吹っ切れた気もしていた。ただすぐに自然なままで正直な自分になれるかといったら自信がなかった。先ほどまでの自分が遠くなっていく気がした。寂しさの正体を悠里は理解した。

相沢がペニスを引き抜くとき、同時に汚物も出そうになりアナルをすぼめた。軽く逝ってしまい床に座り込みそうになったが便意があったためトイレへと急いで駆け込んだ。

悠里が力を入れて便を出すとき、もう以前のように普通には出せなくなっていた。

「ふはぁ……」

レズビアンの白肌 1 2

相沢のペニスが頭を横切る。まだ悦楽の余韻が残っている。すぐに忘れないと、ずっと相沢が頭に残り続けてしまうとさえ思った。

水を流す時またされたらと思い「次は中を綺麗にしとかなないと」と小声で口走った時、震えた。何故次のことを考えているのか。もうこれっきりでおしまいになりたい。相沢とも食事に行かないほうがいい。思い出してしまいそうで、はまり込んでしまいそうで怖かった。

トイレから出るとな垂れながら相沢によるよる近づいていく。相沢のペニスはもう、だらんと垂れ下がっている。

ペニスをやはりいいものとして受け入れられない悠里は、よがり狂ったことを恥のようにも感じ、泣きながら相沢の胸を両拳で叩きまくった。

相沢はしばらく悠里の成すままにさせてから強く抱きしめた。悠里は腕も動かさなくなるほどになった。

「くっ……ああ……」

やはり、感じた。悠里は変わってしまった自分を、それでもどこかで受け入れられないでいた。

「もう、帰りたい」

「お酒も入っているし、ひと眠りしてからにしないか」

「うん……」

悠里は別のベッドで寝ようとしたが薄暗い部屋の中、先ほどの相沢との行為ばかりが頭をよぎる。気が緩んでくると今度は情欲が頭をよぎってくる。一体何をしたいのか。恨みたいのか、感じたいのか、もう混ぜられたプリンのように形を成していなかった。

相沢が寝静まったのを見計らって相沢のベッドに潜り込む。互いにガウン等を着ていないため裸だった。悠里はそっと相沢のペニスを握ってみた。

——どうして男にはこんなものがついてるんだ。

答えなど出ない問いだった。嫌悪感は薄れているが好きになったわけではない。それでも我慢してさずっていると勃起してくる。

そういえば、と悠里は気がついた。自分ばかり感じていたが相沢は逝ってない。男は逝かない

とダメなんじゃないのか。一度したことのある男は逝く事ばかり考えていたのに。

寝たふりをしているのか、深く眠っているのか相沢の目は開かない。悠里はペニスを握りながらじっと寝顔を見つめる。すぐに眠気が襲ってきて眠りの中へと落ちていった。

朝悠里が起きると相沢はもう着替えていた。悠里が起きた事がわかると、カーテンが一気に開け放たれ眩いばかりの朝の光りが部屋一杯に注がれる。

「おはよう悠里。朝ごはんはどうする？」

「食べてく」

光に慣れない目をこすりながら悠里は昨日の出来事は夢だったんじゃないかと錯覚するほど清々しい朝を迎えた。

レズビアンの白肌 13

朝食の間悠里も相沢も無言だった。

相沢の車で送られる間も、悠里は外の景色をずっと眺めているだけで何も喋らない。

ただいつまでも悠里にとって外の景色が眩しく感じる。

家の前に着いた時、悠里はいつまでも車を降りなかった。

「どうした？ もう着いたぞ」

「わかってる」

相沢の方を振り向きもせず外を眺めながら言い、しばらく黙っていた。相沢も催促することなく静かな時間は流れていく。

「ねえ」

と悠里の声かけに振り向いた相沢のネクタイを引っ張り悠里は口付けをした。その時相沢の下唇を力いっぱい噛んだ。

相沢は痛いはずなのに何も言わない。

悠里の舌に血の味が少しした。唇を拭くと手の甲に血がついている。

相沢の下唇は赤に染まって、なお出てきていた。その血を車内にあったティッシュで抑えている。

「ざまあ」

ドアを開けながら悠里は小さな声で悪態をついてニッコリ笑った。